

【地区協議会概要】

・主な説明内容

静岡県では、東日本大震災後、静岡県第4次地震被害想定及び地震・津波アクションプログラム2013を平成25年6月に公表しました。地震・津波アクションプログラム2013は、人命を守ることを最も重視し、ハード・ソフトの両面からできる限りの対策を組み合わせることで実施することにより、第4次被害想定で推計された被害を8割減するために今後10年間で実施するハード・ソフト施策を取りまとめています。この中に、土肥港の整備も位置付けられています。平成25年6月時点の第4次想定では、レベル1津波については、古い想定がベースであったため、新モデルを追加し、津波対策施設の必要堤防高の見直しを行いその結果を今年の6月に公表いたしました。

南海トラフ沿いに予想される地震で発生する津波高ですが、レベル1地震では、最大津波高はT.P.+7m、平均津波高T.P.+6m、レベル2地震では、最大津波高T.P.+10m、平均津波高T.P.+8m、想定死者数は最大1,400人と想定されています。

レベル2の地震の浸水域を見ると、土肥山川右岸側では、土肥小学校付近まで、左岸側では、土肥中学校付近まで浸水すると想定されています。

伊豆市沿岸への50cmの津波到達時間ですが、レベル1地震では3分、レベル2地震では4分と想定されています。

津波を防御する施設の現状ですが、屋形付近はT.P.+3.5m、大藪付近はT.P.+5.5m。レベル1津波に対する必要堤防高は、共にT.P.+9.0mです。実際の整備においては、今後、地元の意見を聞きながら計画高さを決めていきたいと思えます。

静岡県における津波対策は、レベル1の津波に対しては施設整備によるハード対策、レベル2の津波に対してはハード対策とソフト対策を組み合わせた「多重防御」により、できる限り被害を最小化することを目指して進めています。

このように、イメージとしては、レベル1の津波は施設で防ぐような考えですが、実際に地震が発生したときには、レベル1の津波が来るのか、レベル2の津波が来るのかは分かりません。地震が発生したらすぐに避難行動を開始するということが基本中の基本であり、減災への第一歩になります。

対策の実施に当たっては、レベル1の津波を防ぐ施設やレベル1を超える津波に対する「静岡モデル」などのハード対策、「警戒避難体制の整備」などのソフト対策を、地域の歴史・文化や景観等との調和が図られるよう、住民の意見を取り入れ市町との協働により実施します。こうした地域の特性に合わせた津波対策を「静岡方式」と称しています。

県東部・伊豆地域では豊かな自然と温暖な気候により、温泉や海水浴をはじめとした観光産業や漁業が栄えています。また、残念ながら「世界ジオパーク」への登録は見送られましたが、伊豆半島は、その名のとおり地形や地質に富んでおり、沿岸部においては、狭い平地部に山地が迫る入り組んだ地形が数多くあります。これらのことは、生活する住民にとって利点でもありますが、単純に津波対策施設の整備だけを考えると、社会的、地形

的に多くの課題を持っているとも言えます。

このように平地が狭く、レベル 1 の津波対策施設の整備も困難であるような場所では、施設の規模を小さくし、ソフト対策のウエイトを大きくすることにより、津波に対応することも考えられます。

このため、地区協議会では、地域における津波に関する状況（想定被害、避難体制、海岸保全施設の現状等）について、行政と住民等で情報を共有し、避難を前提とした津波対策を基本に減災効果を高めるための津波対策施設等のあり方について検討していきたいと思えます。

・ワークショップ

ワークショップでは、今後起こり得る地震や津波に対して、問題点や事前にどのような準備・対応をすべきかなど自由に意見交換していただきました。

各グループからは、津波被害を抑えるための「堤防のかさ上げ」「水門の設置」「高齢者の避難方法」「避難場所へのアクセス」など様々な意見が出されました。また、土肥地区は海を中心とした観光地ということもあり、「景観」「観光」についても様々な意見が出されました。

・用語説明

レベル 1 の地震・津波

静岡県がこれまで地震想定の対象としてきた東海地震のように、発生頻度が比較的高く、発生すれば大きな被害をもたらす地震・津波

レベル 2 の地震・津波

内閣府（2012）により示された南海トラフ巨大地震のように、発生する頻度は極めて低いですが、発生すれば甚大な被害をもたらす、あらゆる可能性を考慮した最大クラスの地震・津波



【説明の様子】



【話合いの様子】



【話合いの様子】



【発表の様子】